

日本台湾学会設立 20 周年記念シンポジウム 『『新たな世代』の台湾研究』
パネルディスカッション質疑応答録

川上桃子（司会 アジア経済研究所）：

これより、フロアの皆さんからお寄せいただいた質問票にもとづき、質疑応答を進めていきます。まず、4人の報告者全員に宛てた質問がいくつか寄せられていますので、そちらから始めましょう。第一に、台湾研究の「学際性」についての質問です。具体的には、「台湾学会という場があり、他のディシプリンの研究者が傍にいたからこそ可能となったという研究はあるだろうか」というご質問です。第二に、「他の国を対象とする地域研究と対比した際、また理論的な研究との関係という面で、この10年の台湾研究にはどのような変化があったか」というご質問が寄せられています。まずは菅野さんからお答えいただけますか。

菅野敦志（名桜大学）：

2005年に第3回日本台湾学会賞をいただいた際、私の論文が、複数の分野にまたがって候補にあげられた、とうかがったことがあります。その時、台湾学会での様々な学びが私の研究に繋がったのだ、ということ強く感じました。日本台湾学会という場を組織していただいたこと、そこで研究の仲間と出会うことができたことは、我々の世代にとって大変大きな意義を持ったと感じている次第です。「学際性」について、具体的な研究の事例を挙げることは難しいのですが、この学会のもつ学際性が私自身の研究を形作ってきた側面があることを、まずはお伝えしたいと思います。

宮岡真央子（福岡大学）：

人類学は、経済人類学、法人類学、医療人類学といったように、様々な対象に手を出す、いわば「腰の軽い」学問分野だと思いますが、何を対象とするにせよ、研究方法としては、フィールドワークを重んじる、ミクロな視点からものごとを見ようとするアプローチが共通しています。しかし、ミクロの世界で話が完結するかというと決してそういうことはありません。そういう時に、自分達ではなかなか追いきれない法制度や歴史的な変遷といったマクロな側面については、他分野の研究を参照せざるを得ないですし、また参照すべきでもあります。文化人類学者にとり、台湾学会はそういう機会を広い形で与えてくれている場であると思っています。

赤松美和子（大妻女子大学）：

先ほど報告のなかでも触れたように、台湾文学研究は、初期の作家研究から、近年は作家や作品の枠を超えた多元的な視点から新たな文学史を描き直すような研究へとシフトしてきています。いわば、文学研究が歴史研究のなかに回収されつつある、ともいえる状況です。私自身、若林正丈先生や松田康博先生の著作を読まなければ台湾文学研究ができないと感じています。また、他の地域を対象とする研究との関係でいうと、近年、台湾の台湾文学の研究は、韓国との連携を

深めています。これからの世代の研究者は韓国、さらには東アジア全体を見ていかなければならないのではないかと考えています。

家永真幸（東京女子大学）：

個人研究あるいは共同研究の成果で学際性が生かされた優れた成果、ということだと思いますが、すぐには思いつかないのですが、私自身がどうやって成長してきたかを考えると、様々なジャンルを超えた人たちが台湾学会に集まっているということに意味があったと思っています。一方で、今日は文化人類学のセッションに参加して大変興味深い報告を聞いてきましたが、たとえば福建省の軍事境界線の話などは政治学の福田円会員や松田康博会員も実は取り組んできた問題で、基礎的なところでの情報共有が、文化人類学と政治学の間では十分に取れてこなかったとも感じました。せっかくこのような場があるのだから、互いにもっと活発に越境し交流してもよいのでは、と感じました。

川上：

ありがとうございました。もし、他国を対象とする研究との比較、という視点から付け加えられることがあれば、どなたかお話しいただけますか。

宮岡：

「他の地域を対象とする研究と比較した際の台湾研究」というご質問の趣旨にきちんと答えられるか分かりませんが、日本の人類学のなかでも、台湾研究は、旧植民地を対象とする点で、特殊な位置にあるかもしれません。日本の人類学者は、アジア、アフリカを含め、広範な地域に行っていますが、研究対象との距離がこれだけ近く、また旧宗主国に属する者として旧植民地を対象とする、そのことを背負う、というのは、韓国研究なども同様ですが、台湾研究の特徴だと思います。帝国日本域内での比較研究もここ数年、行われるようになってきています。そういう意味では、台湾を対象とする日本の文化人類学研究は、欧米の人類学の研究意識にも近い、フロンティアにいるような感じがします。

川上：

ありがとうございます。次に、個別報告への質問もいくつかご紹介していきます。まず、「日本人のポジショナリティを意識する」とことと「台湾文学研究を日本語で書くこと」の関係についてどうお考えでしょうか、という質問が寄せられています。赤松さん、いかがでしょう。

赤松：

これは星名宏修会員から引き継いだ課題ですが、私自身もまだ答えは出ていません。日本で研究発表するときには、日本人のポジショナリティということをあまり感じないのですが、台湾に1年間滞在した際には、何度も感じる機会がありました。ただ、研究者ですので、日本語で書く

というか、日本語文献に関しては、日本人だからこそ解読できることがあると思います研究しています。これは、自分自身に問い続けなければいけない課題だと思っています。

川上：

菅野会員に対しては次のような質問が寄せられています。「三つのI——アイデンティティ、相互依存、民族統一主義——によるトライアングルを分析する台湾研究」というのは、具体的にはどのような研究でしょうか。また、三つのIという視点と、日本における台湾研究との関係についてはどのように考えていますか。

菅野：

「三つのI」については、一人一人の研究者のテーマについて当てはまる場所があるのではないかと、というイメージから提起をいたしました。私自身は、現代史を中心に研究をしてまいりました。私は先週まで、タイ北部のメーサロン——この地域については若松大祐氏が論文を書かれています、この地に残った国民党部隊の人々は、その後、武装解除し、タイ国籍を得るという道を歩きました——に、学生引率の下見に行っていました。台湾のなかで台湾史研究を考えることと、台湾の外で台湾史研究を考えること、そうした視点の広がり考えたとき、メーサロンでは、台湾は中華民国であるが、そこで表現される中華民国イメージとは、もはや（ルーツとしての中華民国像から大きく変質した）台湾である。現地の人たちは、中国語を話すけれどもタイに現地化している。とはいえ、子供は台湾の大学に華僑枠で送る。そういう状況があるなかで、台湾という自明の存在を問い直す。台湾の存在が台湾のなかだけではなく、外でどのような広がりを持ち、個々の主体のなかで、もしくは社会のなかで受け止められ、把握され、継承されているのかということ、こういう視点から三つのIということを申し上げた次第です。

川上：

続いて、宮岡会員への質問が二つ寄せられています。台湾大学図書館「重返・田野」の展覧の末尾に、展覧設計者の陳偉智氏の言葉として「かつて伊能が台湾を踏査した。今我々が伊能を踏査するのだ」という意味の一文がある。日本人の台湾研究者としてこれをどう理解したらいいのか、やはり再帰性の自覚を、ということに尽きるのか、という質問です。もう一つの質問は、境域に関する研究のなかで、原住民の関わる制度と、それに対する台湾市民・原住民の対応の変遷について研究の有無、今後の可能性についてお聞きしたい、という質問です。

宮岡：

まず「重返・田野」について。私も（あの言葉をみて）おおっと思っていました、同時に陳偉智氏の研究を私たちが参照することもあり、彼の研究も私たちに響いているのですよね。お互いに合わせ鏡のなかにいるという感じもしています。私自身は陳氏ときちんと議論をしたことはないですが、おそらく彼も愛憎入り混じっているというか、最初の頃は批判的に伊能を論じてい

ましたが、今日では半ば別れがたき恋人という印象もあり、ご自身もそういうなかにすっぽりと入り込んでいる。そういう人たちが仲介者になり、原住民族のところへ行って、伊能の研究はこうだ、というふうに紹介し、それを（彼ら・彼女らが）どう解釈するかまでを観察していく。ここでもまた再帰的な現象が起り、いろんなところで共鳴しあっている、という感じです。日本人も再帰性に対して自覚的たれ、ということはおっしゃる通りですが、そういう（多元的に共鳴しあう）ところに身を投じている私たち自身もその状況について自覚的でありたいし、そこで参照されるに足る研究をしなければならないと考えています。

境域に関する研究ですが、実は原住民族に関する研究についてはあまり進んでいません。（原住民族は）あまり外に出て行っていないし、もちろん西村一之会員の漁民研究は海域を生活空間の一部としているアミの方々が大きいにかかわっているわけですが、これも必ずしも原住民族研究という枠組みで行われてきたわけではありません。ただし、境域研究の枠組みを取り払ったうえで考えるのであれば、制度の変遷とそれに対する原住民族の対応という点では、たとえば土地制度などは今まさに揉めているところです。現在はまだ制度が設計されている段階ですが、原住民族からの「こういう伝統領域がある」という主張に対して、一般の平地の人たち、山地に居住している平地の人たち（非原住民族）が反感を抱くということはずっと起こっています。それに関する研究はこれまでも行われてきました。今思いつくのはこのようなものです。

川上：

赤松会員への質問です。日本の書店のアジア文学のコーナーをみると、韓国文学の翻訳数のほうが台湾文学より圧倒的に多い状況にあります。この現状に対してどうお考えでしょうか。

赤松：

韓国文学は最近大変ご活躍目覚ましいです。これまでは、台湾文学は1年に10冊ぐらいコンスタントに翻訳が出版され、これに対して韓国文学は日本で読める機会が少なく、韓国文学の方に（台湾文学の状況が）羨ましがられていたのですね。しかし、この5年ぐらいの傾向ですが、韓国の現代文学が韓国でも人気になり、読まれるようになっていて、そしてそれが（活発に日本語に）翻訳されてもいる、という状況です。私たちも台湾文学をもっと読んでもらえるようにしていきたいと思います。

川上：

家永会員へのご質問です。政治学の分野において、「すくい上げていくべき人々の声」というのは具体的にはどういうものを指しているのか。人々とは誰を指しているのか、という質問です。

家永：

具体的に想定していたのは、最後のスライドで示した若い研究者たちの研究などです。先ほど菅野会員から名前が出た若松大祐氏の泰緬孤軍の研究などは、中華民国人であるが台湾人として

の包摂を拒まれている人たちをどうとらえるか、という問題を扱っています。在外華人のような人たちをどうとらえるか。こういったトピックが政治学の扱うべきことかどうか、という点には議論があるでしょうが。

研究者のほうからアクセスしないと声がなくなってしまう人という意味では、「人々」という枠ではないのですが、日本の敗戦後から2.28事件までの間にどれだけの文書が焼却されるなどしてなくなったのか、想像がつかないところがあります。台湾協会等の人々が一生懸命資料を出してくれてはいますが、日本人としてそこはきちんと探求しなければいけないのではと考えています。具体的に何をしなければいけないかはすぐには答えられませんが。

川上：

今お答えいただいた質問と関連して以下のような問いも寄せられています。台湾という枠組みを所与のものとしてみなしたときにとらえそこねるものや、人々の声をすくい上げる努力を重ねていくこと。同時に、それでもなお台湾という地域の個性を探求していくということ。このことについて、その方向性をもう少し具体的にお話しいただきたい、というご質問です。

家永：

私は、「中華民国」というカテゴリー、「台湾」というカテゴリー、「中華民国人」というカテゴリー、「台湾人」というカテゴリーの関係性を、政治学としてどうとらえるかという問題意識を持っています。具体的なことをお話しますと、よく台湾の複雑性の例として、王貞治の物語が出されます。王貞治は、浙江省出身の在日中国人二世、中華民国籍ですが、台湾で生まれ育ってはいません。さらに話はそこにとどまらず、台湾の南投県埔里の農家出身で、強い台湾人アイデンティティを持つ大豊泰昭——陳大豊が、「台湾のスター」である王貞治に憧れて日本に来て、背番号55をつけて一本足打法で活躍する。そういうことをみていると、一体台湾人というのはどういうカテゴリーなのか。中華民国人とは何か。こういうことを政治学的にうまく区分けできるような座標軸を設定していかなければいけないと思います。私もまだ成し遂げられていませんが、そういう問題についてご指摘いただいたのかなと受け止めています。

川上：

報告者の皆さんに、日本の台湾研究の優位性に関わる質問が寄せられています。かつて、台湾では、自由な台湾研究を行うことができなかった時代がありました。また、台湾学会が設立された20年前には、日本で台湾を研究することの意義はまだ、比較的理解されやすいものでした。しかしこの10年の間に台湾では、中国語による台湾研究の著作が大量に刊行され、しかもその研究水準はきわめて高いものです。台湾という学術コミュニティと向き合ったときに、私たちはどういったスタンスで台湾研究を行っていけばいいのでしょうか、というご質問です。私からさらに質問を付け加えると、日本において、あるいは日本語で台湾研究をすることについて、固有の強みは依然としてあるのか、すでになくなってしまったのか。こういった点について、各分野

の視点からお話いただけますか。

菅野：

日本における台湾研究の意義というのは、ごもっともなお話だと思います。しかし、かつての日本における台湾研究の優位性というのは、台湾側の制限や制約によりかかっていた、そういう状況のうえに「あぐら」をかいていたという側面があったのではないかと思います。日本国内の台湾研究者には、日本人だけではなく、台湾出身の研究者や中国出身の留学生も数多くいます。中国国内ではできない視点から、日本で台湾研究をする中国人研究者もいます。また、台湾の研究者はアメリカ留学時には質の高い研究を行っていても、帰国して教職に就くと極めて忙しくなり、多数のノルマに追われることになる方が多いようです。急ぎ足、駆け足で本数だけを稼ぐ研究にならざるを得ないという事情があるようです。日本の研究者は、必ずしも研究に時間をかけられるわけではないにしても、じっくり（一つの研究に）取り組むうえでの優位性はあるように思います。また、日本の学問領域の広がりや学際性もあります。たとえば、私が在籍している名桜大学では、ラテンアメリカ研究が一つの大きな柱となっているのですが、これは、沖縄がラテンアメリカへの移民を多数輩出してきたことを背景としています。アメリカほどではないにせよ、日本における地域研究は多様な地域を扱っている。その学術的な空間の広がりによって優位性があると考えています。

宮岡：

人類学は他者研究、異文化理解の学ですので、対象との間に一定の距離があることは優位性にも劣位性にもなりえます。これは三尾裕子会員が10年前に述べられていたことですが、外からの視点ということですね。台湾のなかにいたら政治化されてしまうことがらについて、そうならずにすむ立場を保てるという優位性があります。それから、以前からいわれてきた点であり、日本の研究上の優位性という論点とは異なるかもしれませんが、帝国日本の遺産については、日本の立場からさらに探求していくべきであると思っています。

赤松：

日本台湾学会が創立される以前の時期、台湾で台湾文学の研究ができなかった時代の優位性に比べれば、確かに今は台湾でできることが多くなっており、そういった面で、日本における台湾文学研究は、外国文学研究のひとつとしての側面が強くなってきています。ただ、それで優位性がなくなったと考えるなら、日本には日本文学研究しかなくなってしまいます。外国文学研究という側面、また先ほど宮岡会員が触れた、帝国日本の遺産という側面からみた日本語で書かれた（台湾の）文学、また現代の台湾文学は日本を含む世界中の文学から影響を受けているということ、そういう点を踏まえると、優位性はあるのではないかと思います。

家永：

政治学の分野で、日本の研究上の優位性がなくなりつつあることは、すでに10年前に松田康博会員が指摘された通りだと思います。ただ、感傷的な話になるかもしれませんが、台湾を故郷とするわけでもないのに、これだけの人数が集まって「台湾とは何か」ということを真剣に考えている場——そういう場として日本台湾学会は、稀有な場であると思います。そこに、こうやって台湾を故郷とする人たちもやって来て交流して、日本台湾学会が何を考えているのかを観察している。そのこと自体が、東アジアの地域研究、国際的な地域研究の発展に寄与できている、そのようなところがあるのではないかとは思いますが。

川上：

赤松会員の報告のなかで、台湾研究に関わっている研究者のコミュニティとして取り組んでいきたいことの一つとして、修学旅行で台湾に行く高校の生徒さんたちの教育や研修への協力、連携に関する話題が出ました。これについて、高校で非常勤講師をしている方からの経験が寄せられています。高校の生徒たちの台湾についての知識が限られている状況のもと、具体的にどのような連携が考えられるか、可能性やアイデアについてもう少しお聞きしたい、とのことですが。

赤松：

洪郁如会員、山崎直也会員と3人で、まずテキストを作ろうという話になり、出版社と話を進め始めたところです。洪会員の調査によれば、台湾に修学旅行に行った高校がHP等を通じて、何を学んできたのかを報告しているのですが、「日本は（台湾に）近代化をもたらした」といった安易な結論が多いようです。先日、山崎会員の紹介により私たち3人でJTBに行き話をうかがってきたのですが、現状では、JTBの方が生徒たち向けの事前学習で話をしている、もしくは現地日本語を話せる方が講師として（事前学習に）携わっているようです。まだ調査段階ですが、事前学習というプログラムに対して、私たちの研究成果を還元できればと考えています。現状では、ネット等で調べ物をする、いわゆるネトウヨ的な内容にアクセスすることが多くなってしまおうと思います。しかし、山崎会員の調査によると、沖縄への修学旅行は情報が非常に整えられていて、高校生や先生方があらゆる情報にアクセスできるようなHPもあります。そこで、台湾修学旅行に関しましても、HPと、事前学習への講師派遣、テキストを通して、専門的な支援ができればと考えています¹。ぜひアイデアをお寄せください。

川上：

そろそろ時間も迫ってきましたが、もうひとつ質問を挙げますので、どなたかにお答えいただきたいと思います。アイデンティティあるいは歴史的な記憶の研究とグローバル化の視点をどういうふうにつなげていくことができるのでしょうか、というご質問です。

宮岡：

アイデンティティ、歴史、記憶、それと当事者もその身を置いているグローバル化との関係ということですが、人類学からいいますと、例えば石垣直会員の著作が扱っている原住民族の運動は、当事者のアイデンティティの確立、再構築にその中心があるわけですが、同時にグローバルな先住民運動の流れと不可分な関係にあり、また、台湾の大きな政治環境、民主化のなかで展開してきたという側面もあるわけです。日本統治のなかで移住を強いられたこと、抗日の戦いがあったということを踏まえつつ、自分たちの歴史、アイデンティティを再構築している。外的な環境は全く無関係ではなく、今日では、グローバルな様々な主張との関係が見出せる。このような研究も刊行されていることを、ご紹介しておきたいと思います。

川上：

議論はつきませんが、終了時間も迫ってまいりました。最後に、司会として、本日のシンポジウムの総括をしたいと思います。今日の4つの研究報告を聞いて、日本における台湾研究のこの20年というのが、短いようで、実り多い成果がたくさん生み出された、その点では短くはない年月であったことを実感しました。

この20年に起きた最大の変化は、「見えざる他者」であった台湾が、日本において著しく可視化されるようになったことでしょう。特に文学や歴史の領域では、台湾でも日本でも、台湾研究の「顕学化」が進んだことが、今日の報告から明らかになりました。日本台湾学会が、創設時に、また10周年大会のときに掲げていたミッション、すなわち日本における地域研究としての台湾研究の立ち上げ、台湾研究学術コミュニティの発展、といった目標は、着実に達成されたといえるのではないのでしょうか。そして今、私たちは、この初期のミッションを達成したあとの新たな局面を迎えつつあるのではないのでしょうか。

このような台湾および台湾研究の可視化の変化の背後には、台湾の民主化・本土化のいっそうの進展、東アジアの地政学的変化を背景とする台湾への関心の高まり、といったマクロな変化の影響があるでしょう。また、台湾における台湾研究の水準が格段に高まり、日本の台湾研究に大きな刺激を与えるようになったという変化も大きいと思います。私たちは、一人の巨人の肩の上ではなく、多くの先人たちの地道な積み重ねの上になつて、今新しい景色と向き合いつつあるのだと思います。この多くの先人たちのなかには、台湾で台湾研究をしている台湾人研究者、日本で台湾を研究し日本語で成果を発表している台湾出身の研究者、日本語で書く日本人研究者、そして世界の各地で台湾研究をしている多くの研究者たちが含まれます。

いっぽうで、今日の討論からは、残された課題も浮かび上がってきたように思います。10年前のシンポジウムで、モデレータを務めた川島真会員は、「台湾研究における学際性」という問題意識を提起していました。これに照らしてみると、この10年の歩みはどうだったのでしょうか。それぞれの領域では、研究の「解像度」が高まり、問題を深く掘り下げる分析が進んだことが各報告から明らかになりました。一方で、領域間のインタラクションや、地域研究としての学際性を活かした研究といった点では、日本の台湾研究にはまだ多くの課題が残されているように思い

ます。学問の細分化、精緻化、専門化は、社会科学でも人文学でも顕著な潮流だと思いますが、それだけでいいのか、という問いかけが必要であると思います。

なお、今日のシンポジウムでは、文学、歴史学、人類学、政治学という四つの領域の「新たな世代」の研究者にお話しいただきましたが、このほかにも日本台湾学会では、法律、経済などの領域で、数は多くないながらも活発な活動が行われています。新たに育ちつつある領域もあるだろうと思います。今から10年後の30周年シンポジウムでは、どのような領域別に研究報告が行われることになるのか。そこではどのようにこれからの私たちの10年が総括されることになるのか。そのことを楽しみにしたいと思います。今日は長時間、ありがとうございました。

(注)

- 1 その後、日本台湾学会、台湾協会、台北駐日経済文化代表処教育組の協力を得て、2018年9月に、洪会員・山崎会員と赤松は、台湾修学旅行支援研究者ネットワーク (SNET 台湾 <http://jats.gr.jp/snet.html>) を立ち上げた。SNET 台湾は、台湾への修学旅行・研修旅行を実施する学校に、学術的専門性を備えた台湾研究者が必要な支援を提供するプラットフォームである。